

## 『百詠和歌』二百十六番歌

— 王子喬の「簫」の笛について —

今井友子

## 〔抄録〕

源光行の『百詠和歌』二百十六番歌は、『李嶠百二十詠』音楽十首「簫」の詠詩から「仙人幸見尋」を句題とし、王子喬の伝説を付した上で和歌を詠んでいる。前漢の劉向撰と伝わる『列仙伝』によれば、王子喬はたくみに「笙」を吹いて鳳凰の鳴くような音を立て、道士浮丘公と共に嵩山に登り三十余年仙人の修行をし、ついに白鶴に乗って昇天したと伝わる。しかし、王子喬の伝説を取り入れながら、張庭芳『百二十詠詩注』の「周の靈王太子晋、簫をふく」を句題に加え、また「白鶴」は仙人王子喬が昇天

する時の駕であるが、「帰るそらなき鶴の毛衣」と詠んでいることに注目したい。本稿は「王子喬の簫の笛」と、歌語「鶴のけ衣」を考察の起点とすることで、李嶠の「簫の詠詩」が生み出された背景を通して、光行がどのように享受し、またそれをどう和歌に表現したか、『百詠和歌』二百十六番歌の解釈を試みる。

キーワード 百詠和歌、李嶠百二十詠詩注、王子喬、簫の笛、帰る空なき鶴のけ衣

## はじめに

『百詠和歌』（二〇〇四年成立）は、源氏物語の研究者として知られる源光行（一一六三～一二四四）が、初唐の詩人李嶠（六四五～七一四）の『李嶠百二十詠』（李嶠百詠・李嶠雜詠詩とも称する）の一題ことから、詩の一句ないし一連二句を示し、詩句の注または関係のあ

る故事・説話を述べて和歌を詠じた句題和歌集である。『李嶠百二十詠』は平安初期までに将来され『千字文』・『蒙求』・『和漢朗詠集』とともに、「四部ノ讀書」の一として漢詩・和歌を暗誦する幼学書として用いられていた。<sup>〔1〕</sup>

題目に掲げた『百詠和歌』二百十六番歌は、

仙人幸<sup>ニ</sup>見<sup>タリ</sup>尋<sup>ネ</sup>、周の靈王太子晋<sup>シ</sup>、簫をふく、道士浮丘公し  
ろき鶴になりて飛来りて聞く

ふえの音のうらがなくや聞えけん帰るそらなき鶴のけ衣

というもので、<sup>(2)</sup>『李嶠百二十詠』音楽十首「簫」の詠詩から「仙人は幸ひに尋ねられたり」を題とし、周の靈王太子晋（以下、王子喬）の伝説を付した上で和歌を詠んでいる。前漢の劉向選と伝わる『列仙伝』によれば、王子喬は「笙」の名手で鳳凰の鳴くような音をたて、道士浮丘公と共に高山に登り三十余年仙人の修行をし、ついに白鶴に乗って昇天したとある。<sup>(3)</sup>

しかし光行は、王子喬の伝説を取り入れながら、「笙」ではなく「周の靈王太子晋、簫をふく」を句題としている。「笙」と「簫」は、形態・奏法・音色の違う笛である。また「白鶴」は王子喬が昇天する時の駕であるが、それを「帰るそらなき鶴のけ衣」と詠んでいることにも注目したい。

『百詠和歌』成立の経緯は池田利夫氏「百詠和歌と李嶠」の論があり、<sup>(4)</sup>『李嶠百二十詠』は福田俊昭氏『李嶠と雑詠詩』に委曲がつくされ、<sup>(5)</sup>仙人王子喬の受容については吉原浩人氏の論考にくわしい。これらの先学の研究に導かれつつ、本稿は「王子喬の簫の笛」と歌語「鶴のけ衣」を考察の起点とすることで、李嶠の「簫の詠詩」が生み出された背景を通して、光行がどのように受容し、またそれをどう和歌に表現したか、『百詠和歌』二百十六番歌の解釈を試みる。

### 一 『李嶠百二十詠』と張庭芳『百二十詠詩注』

まず『百詠和歌』の具体的な検討に入る前に、光行が用いたとされる『李嶠百二十詠』と張庭芳注『百二十詠詩注』について確認しておきたい。『李嶠百二十詠』の我が国への将来が確認できる文献は、漢籍の分類目録『日本国健在書目録』（八九一年頃）に『李嶠百廿』と記載があることから、<sup>(6)</sup>平安初期には請求していたことがわかる。<sup>(7)</sup> 嵯峨天皇（七八六〜八四二）『李嶠詩』（宮内庁所蔵）は所謂宸翰本で、我が国に現存する『李嶠百二十詠』の最古の写本に部立が残る。<sup>(8)</sup> 以下、部立てを掲げる。

乾象十首	日月星風雲煙露霧雨雪
坤儀十首	山石原野田道海江河洛
芳草十首	蘭菊竹藤萱萍菱瓜茅荷
喜樹十首	松桂槐柳桐桃李梨梅
靈禽十首	鳳鶴烏鵲鷹鳧鶯雉燕雀
祥獸十首	龍麟象馬牛豹熊鹿羊兔
居処十首	城門市井宅池樓橋舟車
服玩十首	床席帷簾屏被鏡扇燭酒
文物十首	經史詩書賦檄紙筆硯墨
武器十首	劍刀箭弓弩旌旗戈鼓彈
音樂十首	琴瑟箏琵琶鐘簫笛笙歌舞
玉帛十首	珠玉金銀錢錦羅綾素布

これらの物名の単題に、五言律詩を詠じた百二十首を『李嶠百二十詠』と呼ぶ。音楽十首「簫」の詠詩は、

虞舜調清管

虞舜 清管を調へ

王褒賦雅音

王褒 雅音を賦す

参差横鳳翼

参差として鳳の翼を横へ

搜索動猿吟

搜索として猿の吟を動す

靈鶴時來致

靈鶴は時に來り致り

仙人幸見尋

仙人は幸に尋ねられたり

為聽楊柳曲

楊柳の曲を聴くが為に

行役幾傷心

役に行きて幾たびか心を傷むる

とあり、第六句「仙人幸見尋」は『百詠和歌』二百十六番歌の句題と一致する。この『李嶠百二十詠』には、盛唐の張庭芳が注釈を施した詩注本が現存する。<sup>(10)</sup>すでに中国では亡佚し、我が国にのみ現存する貴重書である。現存する詩注本は全部で六本あり、このうち完本は四本で、残りの二本は欠本である。四本の完本は慶応大学図書館・天理大学図書館・関西大学図書館・静嘉堂文庫に収蔵される。この中で時代が古く完本である慶応大学図書館本『百二十詠詩注』、「簫」の詩注を以下翻刻する。<sup>(11)</sup>

○**簫** 博雅<sup>三</sup>云・大者<sup>ハ</sup>二十四管无<sup>レ</sup>底・漢謂<sup>三</sup>洞簫<sup>ト</sup>・小者<sup>ハ</sup>十六管有<sup>レ</sup>

底・状如<sup>三</sup>鳳翼<sup>ニ</sup>・其<sup>ノ</sup>声通<sup>三</sup>鳳声<sup>ト</sup>・礼義算<sup>曰</sup>・伏羲作<sup>レ</sup>簫・十六

管事始<sup>三</sup>云・女媧造<sup>レ</sup>風俗通<sup>三</sup>云 舜作<sup>三</sup>竹簫<sup>ト</sup> 其形参差<sup>シテ</sup>・以象<sup>三</sup>鳳翼<sup>ト</sup> 十管長<sup>サ</sup>尺二寸・白虎通<sup>三</sup>云・簫者中呂<sup>ノ</sup>之氣也・五絰通義曰・編<sup>テ</sup>竹<sup>ヲ</sup>為<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>・長<sup>サ</sup>尺有五寸・博雅<sup>ニ</sup>曰・簫大者<sup>ハ</sup>二十三管无<sup>レ</sup>底・小者<sup>ハ</sup>十六管有<sup>レ</sup>底・古<sup>ノ</sup>之善<sup>ク</sup>吹<sup>ラ</sup>弄<sup>玉</sup>簫史<sup>ナリ</sup>漢ノ元帝灵帝大小其説不<sup>レ</sup>同・原<sup>レ</sup>夫簫籥<sup>ノ</sup>所<sup>ハ</sup>生<sup>タ</sup>号<sup>三</sup>江南之丘虚<sup>ト</sup> 洞<sup>ニ</sup>條暢<sup>シテ</sup>而罕<sup>ナリ</sup>節令<sup>ニ</sup>敷<sup>シテ</sup>以扶<sup>疎</sup>也

虞舜調<sup>レ</sup>清管<sup>ヲ</sup> 王褒賦<sup>ニ</sup>雅音<sup>ヲ</sup>

虞書曰・簫韶九成<sup>シテ</sup>鳳凰來儀<sup>ス</sup>・韶<sup>ハ</sup>舜ノ樂也・韶<sup>ハ</sup>紹也・言<sup>ハ</sup>其紹<sup>ニ</sup>堯<sup>ノ</sup>從<sup>一</sup>也・王褒字<sup>ハ</sup>子淵蜀人也・文帝為<sup>三</sup>太子<sup>ト</sup>・喜<sup>レ</sup>褒<sup>ヲ</sup>為<sup>三</sup>洞簫賦<sup>ト</sup>也

参差<sup>ト</sup>横<sup>ヘ</sup>鳳翼<sup>ヲ</sup> 搜索<sup>ト</sup>動<sup>ス</sup>猿吟<sup>ヲ</sup>

舜作<sup>レ</sup>簫参差<sup>シメ</sup>象<sup>ニ</sup>鳳翼<sup>ニ</sup>也・洞簫賦<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>玄猿悲嘯<sup>ト</sup>搜索<sup>タリ</sup>其ノ間<sup>ニ</sup>也

靈鶴時<sup>ニ</sup>來<sup>ル</sup>致<sup>ル</sup> 簫史吹<sup>レ</sup>簫善<sup>ク</sup>致<sup>ニ</sup>白鶴<sup>ト</sup>

仙人幸<sup>ニ</sup>見<sup>レ</sup>尋<sup>ル</sup> 周ノ靈王太子晋吹簫・道士浮丘公變<sup>シテ</sup>作<sup>ニ</sup>白鶴<sup>ト</sup>來<sup>レ</sup>リ也  
為<sup>レ</sup>聽<sup>ニ</sup>楊柳<sup>ノ</sup>曲<sup>ヲ</sup> 行役<sup>ノ</sup>幾傷<sup>レ</sup>心<sup>ヲ</sup>

短簫<sup>ニ</sup>有<sup>二</sup>楊柳<sup>ノ</sup>曲<sup>一</sup>・行役聞<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>曲<sup>ヲ</sup>傷<sup>レ</sup>心<sup>ヲ</sup>也・折<sup>ニ</sup>楊柳<sup>ノ</sup>枝<sup>ト</sup>送<sup>ニ</sup>行人<sup>ノ</sup>曲<sup>也</sup>

※太字は李嶠の詠詩である。

これらの資料から『百詠和歌』二百十六番歌（前掲序）は、『李嶠百二十詠』音楽十首「簫」の詠詩の第六句「仙人幸見尋」と、張庭芳の詩注「周ノ靈王太子晋吹簫・道士浮丘公變<sup>シテ</sup>作<sup>ニ</sup>白鶴<sup>ト</sup>來<sup>レ</sup>リ也」を句題に用いたことが判る。

光行は『百詠和歌』の真名序に、

夫、鄭国公始賦百廿詠之詩、以諭于幼蒙、張庭芳追述数千言之注、以備于後鑑、是以、少壯之昔学之、閑居之今抄之、所謂四韻之間取二句、一題之中綴兩歌是也、伏以、詩者唐室之志、歌者我朝之風也、予、天性尤拙、雖隔碎金彫玉之譽、宿習斯深、猶耽中動外形之詞、窓裏聚雪、久術白氏之業、山辺翫霞、專慕赤人之蹤、仍詠二百四十之歌、成一十有二之卷、縱顧亥豕成字之性、何耐夜鶴思子之志者乎、于時、元久之初、初冬律、朝議大夫源光行病中録之而已

「唐国の李嶠百二十詠の詩は、幼学者を諭す書とし、張庭芳の追述した数千言の注は、備えをもって後の鑑とする。それゆえに若い頃の昔之を学び、閑居の今、之を抄す。いわゆる四韻の間に二句取り、一題の中に二歌を綴る也。詩は唐室の志、歌は我が朝の風なり、一後略」と記す。光行は若い頃に『李嶠百二十詠』を学ぶにあたり、張庭芳の追述した注を手本とし、今、またその内容を認めた上で『百詠和歌』を詠んだことが伺える。

## 二 仙人王子喬について

王子喬は『列仙伝』によれば次のように記される。<sup>①</sup>

王子喬者、周靈王太子晋也。好吹笙作鳳凰鳴。游伊洛之間、

道士浮丘公、接以上嵩高山。三十余年後、求之於山上、見桓良曰、告我家、七月七日待我於緱氏山巔。至時、果乘白鶴駐山頭。望之不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>到。拳<sub>レ</sub>手謝<sub>レ</sub>時人、數日而去。亦立祠於緱氏山下及高山首焉。

王子喬とは、周の靈王の太子晋のことである。好れて笙を吹き、鳳凰の鳴く音をたてた。伊洛の地に遊行の頃、道士浮丘公に接して嵩高山に登った。三十余年の後に、山上で捜すと、桓良の前にあらわれ、「七月七日に、我を緱氏山の頂上で待っているよう、家人に伝えてほしい」と言った。その時が来ると、本当に白い鶴に乗って山頂にとどまった。これを遠くから見ても、そこまで行くことができない。手を挙げて人々に別れを告げ、数日して去った。後日、緱氏山の麓や高山の頂に、祠が立てられた。

王子喬は、周の靈王太子晋のことで、すぐれて「笙」を吹き鳳凰の鳴を作り、三十数年後、白鶴に乗って緱氏山の頂上に現れたとある。この王子喬に関する画像や銘文の遺例は、次の資料にみる事が出来る。

中国深圳市金石芸術博物館の呉強華氏が新たに収蔵された北朝時代（三八六〜五七七）の「石床屏風」（図一）に、王子喬が「笙」を吹く図と、「王子喬吹笙」「浮丘公来聴」の題記が見られる。石床屏風とは死者を弔う為の石の寝台と三方を取り囲む屏風のことで、これまで南朝の王子喬図は確認されているが、北朝時代のもは昨年（二〇一

八) 新たに黒田彰氏により確認された。<sup>(13)</sup>

『昇仙太子碑』は、現在の河南省偃師市の仙君廟にある。則天武后(在位六九〇〜七〇五)が即位後の聖暦二年(六九九)に嵩山と緜山に行幸し、荒廃していた王子晋廟を修復し、昇仙太子廟と改称したもので、

昇仙太子碑並序 一 中略 一 昇仙太子者、字子喬。周靈王之王子也。 一 中略 一 鳳笙流響。恒居伊洛之間。鶴駕騰鑣。俄陟神仙之路。嵩高嶺上。雖藉浮丘之迎。緜氏峯前。終侍桓良之



図1 黒田彰氏提供「石床屏風」拓本(北朝)  
題記「王子喬吹笙」・「浮丘公來聴」

告上 一 後略 一。

と、『列仙伝』の内容が記される。<sup>(14)</sup>  
また時代は下がるが明代の『三才図会』人物卷十(図2)にも王子喬図がある。

このように王子喬は「笙」が巧みなことから、浮丘公とともに嵩高山に登り、再び白鶴に乗って現れるという前漢の劉向撰と伝わる『列仙伝』の内容が、後世にまで広く伝わったことが伺える。<sup>(15)</sup>

これに対して張庭芳は『李嶠百二十詠』の音楽十首「簫」の第六句「仙人幸見尋」に、「周靈王太子晋吹簫」と周の靈王の太子晋が「簫」の笛を吹き仙人になった故事を記す(前掲第一章)。しかし、張庭芳は音楽十首「笙」と「歌」の部立にも王子喬の故事を記している。「笙」の注には「古之善吹王子晋」とあり、「歌」の第一・二句「漢帝臨汾水。周仙去洛濱」の注は、



図2 『三才図会』(万暦三十五年  
(一六〇七))国立国会図書館デ  
ジタルコレクション



漢ノ武帝祠<sub>ニ</sub>汾陰<sub>ニ</sub>后土<sub>ヲ</sub>欣然而中流<sub>ニシテ</sub>而歌曰・秋風起<sub>リ</sub>去白雲飛也・周ノ靈王太子晋好吹<sub>テ</sub>笙<sub>ヲ</sub>・歌遊<sub>ニ</sub>伊洛ノ間<sub>ニ</sub>・浮丘公乘<sub>ニ</sub>白鶴<sub>ニ</sub>而去<sub>レ</sub>ハ也

と「周の靈王太子晋、好れて笙を吹く」と付している。この張庭芳の詩注により、王子喬が吹く笛は「笙と簫」の二説あったことが考えられる。

「笙」と「簫」について、許慎著『説文解字』（永元十二年（一〇〇）成立）は、次のように説明する。<sup>16</sup>

竹部 笙…十三簧。象鳳之身也。笙、正月之音。物生、故謂之笙。大者謂之巢、小者謂之和。从竹生聲。古者隨作笙。

竹部 簫…參差管樂。象鳳之翼。从竹肅聲。筒…通簫也。从竹同聲。

「笙」の形は「象鳳の身なり」と翼を立てて休む鳳の姿に見立てている。「簫」は「參差管樂、象鳳の翼」とあるように、長さの違う竹の管を横に並べ、その形は鳳の翼をしたパンパイプのような笛である。<sup>17</sup>

滋賀県にあるMIHOミュージアム所蔵「技楽俑」（図3）の右から三番目が「簫」を吹く技女で、同じくMIHOミュージアム所蔵「奏楽天人像」（図4）は、「笙」を吹く天人像である。これらの資料から唐代に「笙」と「簫」の笛の存在がわかる。<sup>18</sup>



図3 「技楽俑」（唐代六一八年～九〇七年頃）右から三番目、簫を吹く技女



図4 「奏楽天人像」（北齊五六〇年頃）

日本には「笙」と「簫」の笛は奈良時代頃に伝来するが、源順（九一一～九八三）の『和名類聚抄』<sup>19</sup>管籥類第四十八は、「笙」と「簫」について次のように記す。

笙匏簧附 釈名云笙。音生俗云象乃布江。竹之母曰匏、薄交反俗云豆保。以瓢為之横施於管頭曰簧。音黄俗云之太。以竹鍊作之。今案有十七管。

簫 風俗通云舜作簫。先堯反和名世宇乃布江。其形參差象鳳翼也。一云籟、音頼。一云筊、胡交反簫者編管而吹也、但其長短不同、參差之義是歟、一云簫十六管、今案數諸説不同、五経通

義云、大者二十三管、小者十三管、一云舜所造十四管也。

笙の音は「象乃布江」で、匏（ほう・つぼ）と呼ばれる部分に細い竹管を環状にたてたものである。「笙の笛・鳳笙・そうのふえ・そう」とも呼ばれる。簫の和名は「世宇乃布江」で、形は「鳳の翼」のよう  
で、「管を編んだのを吹く、但しその長短は同じではなく、参差の意味はこれか」とある。このように「笙」と「簫」は、形態・奏法・音色の違う笛である。また舞楽・雑楽・散楽の様子が描かれた通称『信西古楽図』の「舞図楽書戊集」がのこり、楽人がそれぞれの楽器を演奏する絵が画かれている。<sup>(20)</sup> これらの辞書や図により光行は、「笙」と「簫」の笛の違いを把握することができたであろう。

しかしながら、光行が王子喬の笛を「笙」ではなく、「周<sub>レ</sub>靈王太子晋吹簫」を『百詠和歌』二百十六番歌の句題に用いたのには、それを認める何らかの理由があったのではないだろうか。二百十六番歌を解釈する上において、その詠作の背景を探ってみたい。

### 三 唐詩にみる王子喬

李嶠や張庭芳の生きた唐代に王子喬はどのように詠まれているだろう。赤松子とともに神仙の代表として多くの用例があるが、笛を詠んだ漢詩は次のようなものが見られた。則天武后の時代に宮廷詩人として活躍した宋之間（六五六頃〜七一一）の樂府卷第二十九「王子喬」は名を詩題とする。<sup>(21)</sup>

王子喬、愛神仙

七月七日上竇天

白虎揺瑟鳳吹笙

乘騎雲氣吸日精

吸日精長不歸

遺廟今在而人非

空望山頭草

草露湿人衣

王子喬 神仙を愛でる

七月七日に上じて天に竇す

白虎瑟を揺がし鳳笙を吹く

騎に乗じ雲氣日精を吸ふ

日精を吸ひ長く帰らず

遺廟に今人にあらずして在り

空を望む山頭の草

草露人衣を湿らす

と王子喬は「鳳笙」を吹き、今は仙人として廟に祀られることを詠んでいる。

李白（七〇一〜七六二）の「鳳笙篇」は、<sup>(22)</sup>

仙人十五愛吹笙

学得崑丘彩鳳鳴

始聞練氣食金液

復道朝天赴玉京

玉京迢迢幾千里

鳳笙去去無窮已

——中略——

莫学吹笙王子晋

一遇浮丘断不還

仙人十五、笙を吹くを愛す

学び得たり、崑丘、彩鳳の鳴くを

始め聞く、気を練って金液を食するを

復た道ふ、天に朝して玉京に赴くと

玉京迢迢、幾千里

鳳笙去去、窮まり已むなし

学ぶ莫れ、吹笙の王子晋

一たび、浮丘に遇へば断じて還らず

「かの王子晋が常に鳳笙を弄び、一たび浮丘公に遇つて登仙し、再び人間に還つて来なかつた」と、王子喬の故事を引く。

同じく李白の「至三陵陽山」登三天柱石」酬三韓侍御見レ招隱黃山」は、

韓衆騎白鹿 西往華山中

韓衆、白鹿に騎し、西、華山の中  
に往く

玉女千余人 相隨在雲空

玉女千余人、相隨つて雲空に在り

一 中略一

因巢翠玉樹 忽見浮丘公

翠玉の樹に巢ふに因つて、忽ち浮丘公見を見る

又引王子喬 吹笙舞松風

又王子喬を引き、笙を吹いて松風に舞ふ

朗詠紫霞篇 請開蕊珠宮

紫霞の篇を朗詠し、請うて蕊珠宮を開く

步網繞碧落 倚樹招青童

步網、碧落を繞り、樹に倚つて、青童を招く

何日可携手 遺形入無窮

何の日か手を携へ、形を遺れて、無窮に入るべき

仙太子碑』のある「緱山廟」を詩題にして、

澗水流年月 山雲變古今

澗水年月流れ、山雲古今変わらず

只聞風竹裏 猶有鳳笙音

只聞く竹裏の風を、猶鳳笙の音の有るを

「月は流れても、山雲は今も昔も変わらず。只竹林の風を聞くと、鳳笙の音が聞こえる」と、「緱山廟」の風景を詠じる。<sup>(24)</sup>

中唐の詩人鮑溶（生没年不明）の七言絶句「懷レ仙」は、

閩峰綺閣幾千丈

閩峰の綺閣幾千丈

瑤水西流十二城

瑤水西に流れ十二城

曾見周靈王太子

かつて見る周の靈王太子

碧桃花下自吹笙

碧桃の花の下、自ら笙を吹く

と周の靈王の太子晋を思つて、碧桃の花のもとで、自らが「笙」をふく様子を詠んでいる。<sup>(25)</sup>

白居易（七七二〜八四六）の七言絶句「王子晋廟」は、

子晋廟前山月明

子晋廟前山月明かなり

人間往往夜吹笙

人間往往夜笙を吹く

鸞吟鳳唱聽無拍

鸞を吟じ鳳唱へて聴くに拍なし

多似霓裳散序声

多くは霓裳散序の声に似たり

と、「浮丘公が忽然として来かかり、又王子喬をも引き具し、その得意な笙を吹いて松風に舞つて見せた」とある。<sup>(23)</sup>

次に、盛唐の詩人崔曙（?〜七三九）は、則天武后が建立した『昇



「王子晋の廟の前に山月が皎々と輝く時、其霊が下界に降って来て折々笙を吹くようだ。その声調は鸞鳳の鳴くように全く拍がないので、霓裳羽衣の曲の散序を聞くようだ」と詠む。<sup>(26)</sup>このように李嶠以後の唐の漢詩を見渡すと、「笙」の笛の詠作が見られる。

ところが許渾（七九一〜八五四頃）の七言絶句「緱山廟」は、

王子吹簫月滿台　　王子簫を吹き、月は台に満つ

玉簫清轉鶴裴回　　玉簫清らかに転し、鶴は裴回す

曲終飛去不知処　　曲終り飛び去り、処知らず

山下碧桃春自開　　山下の碧桃は春自づから開く

と「簫」を詠んでいる。<sup>(27)</sup>起句「吹簫」を「一作求仙」、承句「簫」を

「一作笙」、結句「春自」を「一作無数」と本文に異同がみられるが、

張庭芳の詩注によれば、王子喬の笛に「笙」と「簫」の二種類の伝承があることから（前掲第二節）、許渾は「簫」を詠んだ可能性が考えられる。

#### 四 日本おける王子喬

日本において王子喬はどのように詠じられているだろうか。日本最

古の漢詩集『懷風藻』（天平勝宝三年（七五二）の五言詩に、<sup>(28)</sup>

遊龍門山 一首 葛野王（六六九〜七〇五）

命駕遊山水 長忘冠冕情 駕を命せて山水に遊び、長く忘る

冠冕の情

安得王喬道 控鶴入蓬瀛

安にか王喬か道を得て、鶴を控きて蓬瀛に入らむ

車駕を命じて散水に遊び、高位高官にある官人の身の煩わしい気持ちですっかり忘れてしまった。どうかして王喬（王子喬）のような仙人の術を会得して、鶴に乗って仙人の住むところに入りたいたいものだと思じる。葛野王の詠詩から、古く飛鳥時代に王子喬の伝説が伝わっていたことがわかる。

勅撰漢詩集『凌雲集』（弘仁五年（八一四）成立）に収録された菅原清公の「秋夜途中聞笙」の七言律詩は、<sup>(29)</sup>

皇城陌上槐風肅

皇城の陌上、槐風肅く

天漢波間桂月明

天漢の波間、桂月明らかなり

不知誰家郎第幾

知らずや、誰が家の郎第幾なり

寫鸞模鳳以吹笙

鸞を写し鳳を模して笙を吹く

金商繞曲秋声亮

金商繞曲、秋声亮らかにして

玉管成文夜響清

玉管成文、夜響清やかなり

王子偶仙何処在

王子仙に偶<sup>あ</sup>ひ、何処にか在るや

洛浜遺熊使人驚

洛浜の遺熊、人を驚かしむ

吉原浩人氏は、この第七句にいう「王子」とは、鳳と「笙」が第四句に用いられていることから『列仙伝』を踏まえた表現であると指摘さ

れる<sup>(30)</sup>

大江維時編『千載佳句』（九四七〜九五七頃成立）は、第三節にあ  
げた鮑溶の七言絶句「懷仙」の第三・四句を引く。<sup>(31)</sup>

笙

773 心羨周<sup>ハ</sup>周<sup>ハ</sup>靈王<sup>ノ</sup>太子 碧桃<sup>ノ</sup>花下<sup>ニ</sup>好吹<sup>レ</sup>笙<sup>ヲ</sup>

鮑溶

藤原公任撰『和漢朗詠集』卷下（一〇一二年頃成立）にも、次のよ  
うに王子喬に関する漢詩が見られる。<sup>(32)</sup>

晴

414 帰嵩鶴舞日高見 飲渭龍昇雲不残

嵩<sup>ウチ</sup>に帰<sup>ル</sup>る鶴<sup>ツル</sup>は舞<sup>ッ</sup>ひて日<sup>タ</sup>高<sup>ク</sup>て見<sup>ユ</sup>ゆ 渭<sup>ミ</sup>を飲<sup>ム</sup>む龍<sup>リョウ</sup>は昇<sup>リ</sup>つて雲<sup>クモ</sup>残<sup>ク</sup>  
らず 以<sup>イ</sup>言<sup>ゲ</sup>ん

類聚句題抄

管弦

462 一声鳳管 秋驚奏嶺之雲

数<sup>スウ</sup>泊<sup>ハク</sup>霓裳<sup>イ</sup> 暁<sup>アキ</sup>送<sup>ツ</sup>緱<sup>ク</sup>山<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>月<sup>ツキ</sup>  
一<sup>イツ</sup>声<sup>セイ</sup>の鳳<sup>ホウ</sup>管<sup>カン</sup>は 秋<sup>アキ</sup>奏<sup>ソウ</sup>嶺<sup>リョウ</sup>の雲<sup>クモ</sup>を驚<sup>オドロ</sup>かす  
数<sup>スウ</sup>泊<sup>ハク</sup>の霓裳<sup>イ</sup>は 暁<sup>アキ</sup>緱<sup>ク</sup>山<sup>ノ</sup>の月<sup>ツキ</sup>を送<sup>オウ</sup>る

連昌宮の賦

仙家付道士隱倫<sup>(33)</sup>

549 王喬一去雲長斷 早晚笙声歸故溪

已上四韻

王<sup>ワウ</sup>喬<sup>ケウ</sup>一<sup>イツ</sup>た<sup>タ</sup>び去<sup>ク</sup>つて雲<sup>クモ</sup>長<sup>チカ</sup>く断<sup>タ</sup>え 早<sup>イツ</sup>晚<sup>カシ</sup>笙<sup>シヤウ</sup>の声<sup>コエ</sup>故<sup>コ</sup>溪<sup>ケイ</sup>に帰<sup>カ</sup>らん<sup>カヘ</sup>

懷旧<sup>クワイキウ</sup>

745 王子晋之昇仙 後人立祠於緱嶺之月

羊<sup>ヤウ</sup>大<sup>ダイ</sup>傳<sup>テン</sup>之<sup>ノ</sup>早<sup>サウ</sup>世<sup>セイ</sup> 行<sup>カウ</sup>客<sup>カク</sup>墜<sup>テイ</sup>涙<sup>ナイ</sup>於<sup>オ</sup>峴<sup>ケン</sup>山<sup>サン</sup>之<sup>ノ</sup>雲<sup>クモ</sup>

文粹

王<sup>ワウ</sup>子<sup>シ</sup>晋<sup>シン</sup>の仙<sup>セン</sup>に昇<sup>ノボ</sup>りし 後<sup>ノチ</sup>の<sup>ノ</sup>人<sup>ヒト</sup>祠<sup>イハ</sup>を緱<sup>ク</sup>嶺<sup>リョウ</sup>の月<sup>ツキ</sup>に立<sup>ツ</sup>つ  
羊<sup>ヤウ</sup>大<sup>ダイ</sup>傳<sup>テン</sup>の世<sup>セ</sup>を早<sup>ハヤ</sup>くせし 行<sup>カウ</sup>客<sup>カク</sup>涙<sup>ナイ</sup>を峴<sup>ケン</sup>山<sup>サン</sup>の雲<sup>クモ</sup>に墜<sup>オ</sup>せり 安<sup>アン</sup>樂<sup>ラク</sup>  
寺<sup>ジ</sup>序<sup>シヨ</sup>相<sup>サウ</sup>規<sup>キ</sup>

菅原道真の廟所を王子喬の祠や羊祜の墮淚碑になぞらえ、道真の威徳  
を偲んだものである。『江談抄』の第六長句事（一一一年頃成立）  
にも、相規の安樂寺序が引かれる。<sup>(35)</sup>

後<sup>ノチ</sup>白<sup>ハク</sup>河<sup>カ</sup>院<sup>エン</sup>編<sup>ヘン</sup>著<sup>シヤク</sup>『梁<sup>リヤウ</sup>塵<sup>チン</sup>秘<sup>ヒ</sup>抄<sup>シヤウ</sup>』卷<sup>クワン</sup>第二<sup>ニ</sup>、法<sup>ホフ</sup>文<sup>ブン</sup>歌<sup>カ</sup>、雜<sup>サツ</sup>法<sup>ホフ</sup>文<sup>ブン</sup>歌<sup>カ</sup>（一一六九年  
頃成立）には、

224 白<sup>ハク</sup>道<sup>ダイ</sup>猷<sup>ウ</sup>が旧<sup>キウ</sup>き室<sup>シツ</sup>、王<sup>ワウ</sup>子<sup>シ</sup>晋<sup>シン</sup>が故<sup>コ</sup>の跡<sup>セキ</sup>、一<sup>イツ</sup>々に巡<sup>メグ</sup>りて見<sup>ミ</sup>給<sup>タマ</sup>ふに、昔<sup>ムカシ</sup>の

夢<sup>ユメ</sup>に異<sup>イ</sup>ならず

と天台大師智顛（五九七歿）が天台山にはいつて、白道猷（東晋の  
僧）のこもった古い石室や王子晋の旧跡などを、一つ一つめぐってご  
らんになると、昔大師が長沙でごらんになつた夢と少しも違つてい  
なかつたとある。<sup>(36)</sup>

光行の和歌の師藤原俊成撰『千載和歌集』第十六雜歌上（一一八七



図5 本堂全景



図6 太子堂「王子喬」  
(一九一八年再建)



図7 山門「簫史」  
(一八〇九年再建)

年九月奏上)は、

竜門寺にまうでてて仙室に書付け侍りけり

1038 あしたづに乗りて通へる宿なれば跡だに人は見えぬなりけり

能因法師

と平安中期の歌人能因法師の歌を撰集している。<sup>(37)</sup>

藤原隆房著『朗詠百首』懐旧部(成立年不明)は『本朝文粹』巻第

十一・詩序四「初冬、陪管丞相廟。同賦籬菊有残花」から「王子晋之

昇仙 後人立祠於緱嶺之月」(和漢朗詠集745同)を句題として、次の歌を詠む。<sup>(38)</sup>

87 このみねにたつるやしろはむかしみし人を忍ぶのものとなりけり

このように王子喬伝説は、古くは飛鳥時代に将来し、漢詩や和歌の句

の彫刻(図7)の他、境内のあらゆる建造物に見事な彫刻の仙人が見られた。<sup>(39)</sup>

他にも富山県富山市八尾町上新町の曳山(祭礼の山車)の隅柱の金具、滋賀県大津祭の山鉾「西宮蛭子山」の見送幕「王子喬昇天の図刺繍」、京都女子大学蔵江戸時代の双六「列僊寿娛祿」文政六年(一八二三)、拙宅の浜仏壇(江戸後期から明治初年頃作)の内扉にも「笙」を吹く王子喬図が施されている。このように日本において、「笙」の笛は王子喬、「簫」の笛は簫史という組み合わせが一般的に広まっている。

## 五 『百詠和歌』と『李嶠百二十詠詩注』

さてそこで、『百詠和歌』二百十六番歌を解釈するにあたり、李嶠の「簫」の詠詩と張庭芳注『百二十詠詩注』について、ここでもう一度考えてみたい。光行は『百詠和歌』の前に『蒙求和歌』を編纂している。唐の李瀚『蒙求』(古人の逸話などを四字句の韻語で記し、類

似の事跡を配列して編纂したもの、八世紀前半成立)の二五〇条の故事を抜き出して和訳し、各々にその内容を題材として読んだ和歌一首を添えたものであるが、和歌集のように「春 夏 秋 冬 恋 祝 羈旅 閑居 懐旧 述懐 哀傷 管弦 酒 雜」の部に分ける。しかし、『百詠和歌』は、『李嶠百二十詠』の部立をそのまま踏襲している。『百詠和歌』簫の部と『李嶠百二十詠詩注』の「簫」の部(前掲第一節)を比較すると、

① 簫 舜、簫をつくり給へり、其形参差として鳳のはねにかたどれり、

② 十管、ながさ二尺なり、笙事故

③ 搜索動猿吟 玄猿の音を聞きて、悲嘯搜索

二二五 秋ふかきみ山のいほのふえの音にましらなくなりあか月の空

⑤ 仙人幸見尋 周の靈王太子晋 簫をふく、道士浮丘公、

しろき鶴  
になりて飛来りて聞く

二二六 ふえの音のうらがなしくや聞えけん帰るそらなき鶴のけ衣

太字①③⑤は『李嶠百二十詠』と対応し、波線②④⑥は『百二十詠詩注』と対応することがわかり、『李嶠百二十詠』は漢文のまま、『百二十詠詩注』は訓読体にすることで典拠を明らかにしている。また、光行は『李嶠百二十詠』を句題に引くにあたり、張庭芳の追述した注を

手本とし、今、またそれを認めた上で『百詠和歌』を詠んだことは、『百詠和歌』の真名序(前掲第一節)により伺える。しかしながら第四節で考察したように、日本における王子喬の伝説は『列仙伝』の、「笙」の名手で鳳凰の鳴くような音をたて、道士浮丘公と共に嵩山に登って三十余年仙人の修行をし、ついに白鶴に乗って昇天したという内容がよく知られる。この王子喬の笛の笛の違いについて、光行ほどの学者ならば、張庭芳の詩注に何らかの根拠を認めた上で受容したのではないだろうか。

その根拠の一つとして考えられるのが、『旧唐書』(五代後晋、劉昫撰、九四五年成)の次の記事である。李嶠の仕えた則天武后が即位した九年後の聖曆二年(六九九)に内殿で催された曲宴の出来事を次のように記す。

時諛佞者奏云、昌宗是王子晋後身。乃令被羽衣、吹簫乘木鶴、奏樂於庭、如王子晋乘空。辞人皆賦詩以美之、崔融為其絶唱。 (『旧唐書』卷七十八列伝第二十八張行成)

ある時、諛佞(ゆねい)者(ひと)が、武后に張昌宗を王子晋の生まれ変わりと奏した。そこで昌宗に羽衣(鶴の毛衣に同じ)を被せ、木鶴に乗せ簫を吹かせて、庭で樂を武后に奉る。まるで王子晋が空に乗ずる如くである。辞人は皆之を美しく詩に賦し、崔融は優れて詩を賦す。

則天武后は寵愛する張易之と張昌宗の兄弟が活躍できるよう控鶴府と

いう役所を新設し、張易之をその責任者にすえると、ある時、張昌宗を王子晋の生まれ変わりとへつらう者がいた。そこで武后は昌宗に鶴の羽衣を着せ、木の鶴に乗せ、「簫」を吹かせるということの内宴で興じ、人々はその様子を美麗美句をもって詩に賦しているのである。<sup>42)</sup>

歐陽州等撰一〇六〇年成の『新唐書』(卷二百四 列伝第二十九 張行成)にも「昌宗及王子晋後身、后使被羽裳、吹簫、乘寓鶴」と、昌宗は王子晋の後身なので、則天武后は羽裳を被らせ、「簫」を吹き寓鶴に乗るとある。光行はこの史実を意図的に『百詠和歌』二百十六番歌に詠み込んだのではないだろうか。

### まとめ — 『百詠和歌』二百十六番歌の解釈 —

我が国では、王子喬は「笙」が巧みで、浮丘公とともに嵩高山に登り、再び白鶴に乗って現れるという『列仙伝』の内容が広く知られていた。現存する画像や銘文の遺例は、「笙」の笛を吹く王子喬である。しかし、第二節で考察したように張庭芳『百二十詠詩注』の「簫」・「笙」・「歌」の詩注により、王子喬の笛に「笙」と「簫」の二種類の伝承のあることが解った。

光行は幼い頃より『李嶠百二十詠』と張庭芳『百二十詠詩注』の両書を学び、今また『百詠和歌』を詠作するにあたり、両書を鑑として用いることから、当然王子喬の笛に二説あったことは習知していたはずである。その上で、李嶠の音楽十首「簫」の詠詩「仙人幸見尋」と、張庭芳『百二十詠詩注』の「周の靈王太子晋、簫をふく、道士浮丘公、しるき鶴になりて飛来りて聞く」を句題に用いたのである。こ

れらをふまえて、『百詠和歌』二百十六番歌の解釈を試みたい。

ふえの音のうらがなくや聞えけん帰るそらなき鶴のけ衣

「ふえの音」は、句題に「周の靈王太子晋、簫をふく」とあるように、王子喬の「簫」の笛の音のことである。「音」は聞く人の耳にしみと訴える音のことで、「うらがなくや」の「うら」は心の意で、もの悲しいこと。「や」は係助詞(疑問……か)。したがって上の句は「王子喬の吹く簫の音色は、もの悲しく聞こえるのではないだろうか」と訳することができる。歌語「鶴のけ衣」は、鶴の長寿にこと寄せた賀の歌で詠まれることが専らで、本来は羽毛をいい、また鶴自体の称とされるが、鶴の子どもを思ふ情の深いことから、愛情をこめて着せた産着の称にもなっている。ここでは仙人王子喬を引くことから、長寿を言祝ぐ鶴といえる。

この歌のなかで、解釈の難しいのが「帰るそらなき鶴のけ衣」である。『和漢朗詠集』414は「嵩に帰る鶴」、『千載和歌集』1038は「あしたづに乗りて通へる」(前掲第四節)とあるように、鶴は人界にやっつて、再び仙界に去って行く仙人の乗物である。仙界と人界とを結び使うとして登場する鶴を、「帰るそらなき」と詠むことに矛盾が生じ、他に用例が見られないことから、光行独自の詠み方といえる。

この下の句を訳するにあたり、注目するのが『旧唐書』の、則天武后の寵臣張昌宗を王子喬の化身と見立てて鶴の毛衣を着せ、木鶴に乗せ、「簫」を吹かせることを内宴で興じ、その時の人々は美麗美句を



もって詩に賦すという記事である（前掲第五節）。この宮廷での出来事は、則天武后の醜聞として世間に広まったことにより、『旧唐書』『新唐書』に取られたといえる。

光行はこの有名な故事を何らかの資料により知り得て、『百詠和歌』二百十六番歌に詠み込んだとすれば、「帰るそらなき鶴のけ衣」は、鶴の毛衣を着た張昌宗と、木鶴を指すのではないだろうか。以上の考察を踏まえて『百詠和歌』二百十六番歌について次のような解釈を試みた。

王子喬の後身と称された張昌宗は、則天武后の命により鶴の毛衣を着て木鶴に乗って簫を吹く。この簫のふえの音は、もの悲しく聞こえたのではないだろうか。空に帰ることのない鶴の毛衣を着た張昌宗と木鶴よ。その遊戯そのものは空しい。

王子喬の「簫」の笛の考察から以上のような解釈を試みた。しかし、李嶠が仕えた則天武后の宮廷の故事を踏まえて、光行が『百詠和歌』を詠じたということは、これだけの考察では断定しがたく今後の課題としたい。

## 〔注〕

(1) 太田晶二郎氏「四部ノ読書考」〔歴史教育〕第七卷第七号、一九五九年七月。『太田晶二郎著作集』第一冊所収）は、『後宇多院御遺告』の童子の教育に関する條の「先教二俗教一、（中略）外教則千字文・百詠・蒙求・和漢朗詠」を挙げ、「この四種を往事、一組みものとして幼学に用いる慣習であつて、これを以て「四部ノ読書」と為した、と余は推測するのである」と指摘される。

- (2) 『百詠和歌』の本文と訓は、伝嵯峨天皇宸筆本に最も近い本文をもつ内閣文庫本（柄尾武氏編『百詠和歌注』汲古書院、一九七九年所収）による。
- (3) 沢田瑞穂氏（『列仙伝』解説、平凡社、中国の古典シリーズ4、一九七三年、五八三頁）は「前漢の劉向撰でありえないばかりか、後漢桓帝（在位146～167）よりも後の人の筆になったということになり、考証学者が、本書をもつて三国時代もしくは六朝人の作とみた説と一致してくる」と指摘される。
- (4) 池田利夫氏「日中比較文学の基礎研究 翻訳説話とその典拠」（笠間書院、一九七四年）所収。「百詠和歌と李嶠雜詠」（『鶴見女子大学紀要』第7号、一九六九年二月）。
- (5) 福田俊昭氏「李嶠と雜詠詩の研究」（汲古書院、二〇一二年）。
- (6) 『日本国見在書目録』は、国立国会図書館デジタルライブラリーを参照した。
- (7) 小島憲之氏『上代日本文学与中国文学』（塙書房、一九六二～六五年）は、万葉集卷四の詠物歌の歌題の配列と『百二十詠』の詩題の順序との近似や上代漢詩文における同書の典拠利用の可能性を指摘される。
- (8) 本文は宮内庁所蔵『李嶠詩 嵯峨天皇』（名兎耶明氏編『李嶠詩 嵯峨天皇』、天来書院、二〇〇〇年）の影印を用い、文字の判読出来ない箇所は、名兎耶明氏の釈文による。
- (9) 本文と校勘は柳瀬喜代志著『李嶠百二十詠索引』（東方書店、一九九一年）により、本稿が問題とする第六句の本文異同はない。訓は一部私に訂正した。
- (10) 福田俊昭氏は『李嶠百二十詠』の制作時期は不明としながらも「垂拱元年（六八五）から長安四年（七〇四）までに詠出したと考えられる」とし、張庭芳の『百二十詠詩注』は天宝六年（七四七）の成立であるから、李嶠の死後三十五年を経過してからのことである」（前掲注5に同じ、五一二頁）とされる。
- (11) 本文は慶応大学図書館蔵本『百二十詠詩注』唐李嶠撰・張庭芳注・胡

志昂氏編『日藏古抄本李嶠咏物詩注』（海外珍藏善本叢書、上海古籍出版社、一九九八年）による。目録の形式は御物本や建治本と同じで、古い形体を保っているが制作や書写年代を示す識語がない。旧字体・異体字は便宜上通行の字体に改める。

(12) 本文は校箋本の最善本とされる王叔岷撰『列仙伝校箋』（中華書局、二〇〇七年）により、旧字体は便宜上通行の字体に改める。

(13) 黒田彰氏「呉氏藏王子喬石床について——付張洹氏藏北魏石床二種」（『佛教大学文学部論集』一〇四号、二〇二〇年三月）。

(14) 本文は『唐・則天武后 昇仙太子碑』（書跡名品叢刊、二玄社、一九五九年）による。

(15) 吉原浩人氏「天台山の王子信（晋）考——『列仙伝』から『熊野権現御垂跡縁起』への架橋——」（『東洋の思想と宗教』第十二号、早稲田大学東洋哲学会、一九九五年三月）は、「王子晋伝承においては、現行の『列仙伝』の「王子喬」伝が後世に与えた影響が圧倒的に大きく、後漢には既に現行本文が成立していたことは確実と思われる」と指摘される。

(16) 本文は中國哲學書電子化計劃データベースによる。

(17) 王子淵（褒）の「洞簫の賦」（『文選』音楽上）はこの「簫」の性質を詠じたもので、宋代以降は短管の豎笛（尺八のような笛）が「洞簫」と名付けられる。くわしくは、中純子氏「詩賦が織り成す中国音楽世界——洞簫という楽器をめぐる」（『中国の音楽文化 三千年の歴史と理論』勉誠出版、二〇一六年）所収を参照されたい。

(18) 図3・図4はMIHOミュージアム主任研究員稲垣肇氏より御提供頂く。紙面を借りて御礼申し上げます。

(19) 日本最初の漢和辞書。十巻本と二十巻本とがあり、国会図書館本は、元和三（一一一七）年頃那波道円が校訂・刊行した二〇巻本の古活字版である。本文は国立国会図書館蔵デジタルライブラリーを用い翻刻した。

(20) 東京藝術大学大学美術館収蔵品データベース参照。信西入道藤原通憲（一一〇六～一一五九）の関与が指摘されるが、それ以前の平安初

期に成立したとの説もある。

(21) 『全唐詩』巻五一。

(22) 『全唐詩』巻百六十四。訓読は久保天随氏訳『李白全詩注』（日本図書センター、一九七八年）による。

(23) 『全唐詩』巻百七十八。訓読は前掲に同じ。

(24) 『全唐詩』巻五百三十八。

(25) 『全唐詩』巻四百八十五。

(26) 本文は平岡武夫・今井清両氏篇『白氏文集歌詞索引』（同朋舎出版、一九八九年）により、訓は佐久節氏訳『白樂天全詩集4』（日本図書センター、一九七八年）による。

(27) 『全唐詩』巻五百三十八。

(28) 本文と解説は小島憲之氏校注『懷風藻』（日本古典文学大系69、岩波書店、一九六四年）による。

(29) 本文は肥前松平文庫『凌雲集』（国文学資料館蔵デジタルライブラリー）による。旧字体は通行の字体に改め、訓読は私に付した。

(30) 吉原浩人氏「天台山の王子信（晋）考」（『東洋の思想と宗教』早稲田大学東洋哲学会、一九九五年三月）。

(31) 本文と訓点は金子彦二郎氏著『平安時代文学と白氏文集 句題和歌・千載佳句研究編』（培風館、一九四三年）による。

(32) 本文は国宝「蘆手絵和漢朗詠抄」下巻、十二世紀、京都国立博物館蔵、E国宝）を参照し、訓読とルビは、菅野禮行氏校注・訳『新編古典文学全集19和漢朗詠集』（小学館、一九九九年）による。

(33) 伊藤正義氏・黒田彰氏・三木雅博氏編著『和漢朗詠集古注釈集成』（大学堂書店、第一巻一九九七年、第二巻上下一九九四年、第三巻一九八九年）により、諸本の本文を確認するが異同はなく「笙」である。

(34) 中国晋の人。二二一年～二七八年。死後、侍中太傅を追贈され、羊太傅といわれる。生前峴山の風光を愛し終日飲酒言詠した。（晋書・羊祜伝）。

(35) 大江匡房談、藤原実兼筆録。天永二年（一一一一年、匡房没）頃成立

深謝申し上げます。

- か。「類聚本系江談抄注解」による。底本は群書類従本。
- (36) 本文と解説は新聞進一・外村南都子両氏校注・訳『元訳日本の古典第三十四巻梁塵秘抄』（小学館、一九八八年）による。
- (37) 千載集は寿永二年（一一八三）二月、後白河院の下令により、藤原俊成（当時は出家して釈阿）が撰者となり、文治三年（一一八七）九月奏上（仮字序）、翌四年四月奏覧された。本文と解説は『新編国歌大観』による。
- (38) 従来作者は藤原家隆とされてきたが、藤原隆房（一一四八～一二〇九）の作品であることが確認されている。本百首の句題の出典は、和漢朗詠集、新撰朗詠集などであるが、佐藤恒雄氏「『朗詠百首』をめぐって」（香川大学教育学部研究報告第八二号）は「日常的な様々な朗詠の場において、実際に朗誦されていた詩文、あるいはそのためのテキスト類の中から選んだ詩句」であると指摘される。
- (39) 富山県南砺市井波町は、東本願寺井波別院瑞泉寺を中核として開けた門前町であり、精緻な彫刻欄間に代表される彫物の町として知られる。瑞泉寺は明徳元年（一三九〇）の創建。井波別院瑞泉寺の御協力により、二〇一九年八月九日（金）に撮影する。
- (40) 『井波別院瑞泉寺の彫刻と四箇寺の唐狭間』（寺の町アート3いなみ実行委員会発行、二〇〇九年、十四頁）は、笙を吹き鳳（鶴）に乗る仙人を「簫慕」と記すが、「王子喬」の間違いであろう。
- (41) 前掲注同、三頁は、簫を吹き鳳凰を招く仙人を「簫慕」とするが「簫史」の間違いであろう。
- (42) 則天武后については、気賀澤保規氏『則天武后』（講談社学術文庫、二〇一六年十一月）を参照した。

### 〔付記〕

本稿は、二〇一九年九月六日から七日に西安外国語大学において開催された「東北アジア漢文写本の過去と未来」第五回シンポジウムにおいて発表された内容をまとめたものである。ご指導頂きました黒田彰教授に心より

（いまい） ともこ） 佛敎大学研究員

（指導教員・黒田 彰 教授）

二〇一九年九月三十日受理